［報告］

同志社大学大学院 総合政策科学研究科 ソーシャル・イノベーションコース 10 周年記念フォーラム

～学び究める！社会を変える知恵と技～（2017 年 11 月 23 日）（その 2）

佐野淳也・坂本　聡・田浦健朗・手塚　勲・西村和代・渡辺雄人・奥野美里・廣瀬昌代・
李　月・森雄二郎・中川雄貴・杉山雅昭・関根千佳・新川達郎・今里　滋（登壇順）

【第２部】SI コースのいま ～「自分ごと」から拓く未来

はじめに

「ソーシャル・イノベーションコース 10 周年記念フォーラム」は、同志社大学大学院総合政策科学研究科に 2006 年より開設されて以来 10 年を経たことを記念して催行された。本フォーラムは、2017 年 11 月 23 日（木・祝）に、同志社大学烏丸キャンパス志高館で開催された。プログラムは 3 部構成であり、「第 1 部　同志社ソーシャル・イノベーション（SI）コースのこれまで」においては、「ソーシャル･イノベーションコースの 10 年の歩み」と題するスペシャルムービーの後、記念対談「SI コースを設立した思い &10 年を振り返って」を行った。「第 2 部　ソーシャル・イノベーションコースのいま」においては、コースで学ぶソーシャルドクター達が語る研究と実践、特に社会人大学院の日常が語られた。「第 3 部　ソーシャル・イノベーター教育の未来」においては、教員や修了生多数の参加のもとにダイアログ「ソーシャル・イノベーター教育のこれから」が語られた。

今回の報告においては、前回紹介した第 1 部に引き続いて、上記プログラムの第 2 部を紹介することとし、第 3 部については機会を改めて報告したい。なお、質疑応答の一部は、紙幅の関係で要旨のみとさせていただき割愛させていただいた。（文責　新川達郎）

写真 1　修了生の方々の発表

「ソーシャルドクター達が語る、研究と実践のいま」

佐野：第二部の方を再開いたします。SI コースでドクターを取られた方のお話をお伺いします。このコースは、ソーシャルドクター、社会の病気を治すお医者さまを育てようというのが設立の趣旨になっております。実際に博士を取られた方は、過去 12 名います。そのうち 5 名の皆様に発表いただきます。

坂本聡さん、田浦健朗さん、手塚勲さん、西村和代さん、渡辺雄人さん、発表者の方は前の方に座ってください。

では、お一人 5 分ずつということで、大変短い時間で恐縮ですが、残り 1 分には、ゴングを鳴らします。それから 1 分後に終了となります。よろしくお願いいたします。

トップバッターは坂本聡さんです。皆さん、拍手でお迎えください。（拍手）

坂本：皆さん、こんにちは。発表させていただきます。敦賀からやってきました。「研究と活動の今」ということで発表させていただきます。

進学した背景と目的です。今から 13 年ほど前に福井大学の先生から、「生き物と出会う体験が人を成長させる、命の大切さに気づくきっかけとなるのではないか」ということを講演で聴きました。それと、エリクソンの『ライフサイクル』という本を読んで研究したいなという気になりました。

行政に勤めていました。行政はハード面は強いのですがソフト面で弱い。弱いという意味は、人の動きとか内面的なものには予算をつけることはできない。ですから、そういうことでも研究をしたいと思いました。

最初の前期課程で農業サポーターと子どもたちとの学び合いということで、農業サポーターが子どもたちに農業体験をさせていく。ヴィゴツキーの『発達理論から見た考察』ということで見てみますと、手助けによって子どもが成長した部分がサポーターの喜びとなった、という知見が得られました。

後期課程では、そういった知見をもとに子ども主導型公共圏の形成による地域再生ということで研究を行いました。福井県の美浜新庄地区というところで、獣害が多く発生したので、子どもを主導とすることによって、その対策の一つのきっかけといいますか、イノベーションを起こすことができないのかな、ということでやってみました。

博士課程から現在までの経歴ということでひとまとめにしました。博士・前期、後期で分けました。前期の部分は先ほどお伝えした部分で、後期においては子どもの主導で地域の活動をやってきました。ただ、ヴィゴツキー発達理論にもとづいてやった段階では、獣害対策に対してのみの知見というか学び合いですと、例えば、獣の害は獣の責任だという結論で終わってしまう、ということで、さらにワーチの研究を採り入れて、幅広に地域を学ぼうと考えました。地域の人がどういう視点で獣害を思っているのか。地域全体で学び合いをしました。そういったことの結果として、グローバル・コミュニティ・キャピタルの研究ということで、子どもたちを中心に地域の輪が広まっていった、という知見が得られました。

仕事によっては課程博士学位を取ったことで、どう影響したのかということですが、大変影響しました。本省の人たちの協力も得ていたので、本省に来ないかというう れしいお声もかけてくださいましたが、やはり現場でやっていきたいという気持ちが強かったので、出先の本局で事業の企画を担当していました。仮説を立てて、より客観的な方法で検証して、解決に導かなければ再度仮設を立て直す、という研究のスタイルで事業を進められたことも良かったかなと思います。

また、ソーシャルキャピタルということで、どういうときに、こういうことができるのか。寛容性というものがあるのではないか、というところで、この寛容性について踏み込んでまた研究したい。仕事が多忙だったので、研究はできないということで、思い切ってあと 2 年あったんですが、退職しまして、まちづくり会社の方に雇ってもらいました。

最後に、私と一緒に頑張ってくれた A 君を紹介したいと思います。本当に人が育つというのが、本当にうれしくて私の唯一の喜びです。このときは安藤スポーツ・食文化振興財団の賞を取ったときに新聞記事になったのです。本当に今も誇りに思っています。ありがとうございました。（拍手）

佐野：ありがとうございました。寛容性というキーワードが出てきました。私も地域づくりの研究をしていまして、非常に興味深くお聞きしていました。ありがとうございました。

では、続きまして、田浦健朗様です。では、よろしくお願いいたします。

田浦：皆さん、こんにちは。気候ネットワークで活動をしています田浦健朗と申します。今日は本当にこういう貴重な機会、そして、すごく楽しいところで発言の場をいただきまして、ありがとうございます。

私は 2012 年にこの後期課程に入学をさせていただきました。その 3 年後に修了いたしております。その中で、気候ネットワークについて少しだけご紹介をさせていただきたいと思います。

ちょうど京都議定書ができてから 12 月で 20 年になります。そのときから、気候変動問題、地球温暖化問題の解決に向けて活動をしており

ます。気候ネットワークができて来年の 4 月でちょうど 20 年になります。私たちは気候変動に関する国際交渉、国全体の政策、そして地域の活動という 3 つのレベルの活動と、政策提言を柱とした活動に取り組んでいる全国ネットワーク組織です。そういう組織で 20 年間やってきました。

ちょうど入学した 2012 年のころは、コペンハーゲン会議が終わって、もう一度、私たちの活動を振り返ってみる必要があるんじゃないか、と思った次第です。それから、いろいろな自治体の現場などで、新川先生にもご一緒させていただく中で、ぜひ、こちらで研究してみようということで、気候変動政策における環境 NGO の役割、影響力に関する研究ということで、自ら働いています気候ネットワークを事例として研究いたしました。

中身に触れる時間がないんですが、環境 NGO に影響力はあり、役割は大きいだろう。しかし、課題はまだまだある、という結論でありました。その中で、ソーシャルイノベーションとの関わりということでは、私たちが取り組んだ家電製品の省エネラベルの活動があり、地域のパートナーシップの活動が法律に反映されるとか、市民共同発電所づくりで様々な工夫をして、新しい制度・仕組を築いたりしてやってきた、というようなことが、具体的なソーシャルイノベーションでした。また、教育でもパートナーシップで新たなモデルになる活動にも取り組んでいます。

新川先生からのアドバイスで、実は気候ネットワークの組織そのものであったり、活動全体がソーシャルイノベーションであるとの示唆をいただき、「ああ、そうだったんだ」と気づいて、その要素を入れ込んでいったということで、このコースで研究した成果があったかと感じています。私は入学するまでソーシャル・イノベーションを特に意識していなかったので、特別な印象として残っています。

その後、この研究の中身をわれわれの今後の活動方針を検討するところで、活かしていくことができればと思います。ただ、まだまだそれがいろんな組織に波及できていないのが課題かなと思います。

そういう中で、私たちにとって、そして、世界全体にとってパリ協定の採択・発効というのは、非常に大きい意義があるんだろうなと思います。今日のテーマ、「社会を変える」というところでも関連していると思います。私たちが活動している中で、世界中の市民社会とつながってやっていくと、その力がすごく大きくなると実感していまして、非常に重要だなと思っております。

パリ協定は、国連の約束ごとですが、その中に、地域や民間の役割が重要だと位置づけられています。したがって、世界の約束ではあるけれども、足下からしっかりとイノベーションをつくってやっていくことが重要だと思っています。特に、電力システム改革とかは再エネ 100％時代の中で、もっともっとイノベーションが必要だなと実感しているんです。それを担っていく人々がいっぱい必要です。私たちは今、様々な活動に取り組んでいますけれども、まったく足りていません。ぜひ、この皆様方の中からわれわれと一緒にやっていただける方、パリ協定を一緒にやって実施していただける方を求めていますので、ぜひ、よろしくお願いいたします。どうも、ありがとうございました。（拍手）

佐野：田浦さん、ありがとうございました。最近関西電力をやめて、グリーナという自然エネルギー 100％の新電力会社に変更いたしました。電力料金があまり変わらなかったのでそれにしました。結構、市民ができることがすいぶん増えてきますよね。お勧めの新電力のリストも、どうもありがとうございました。

今度は手塚勲さんお越し下さい。私は徳島出身なんですけど、手塚さんも徳島に今おられるということで、わざわざ来ていただきました。では、発表の方をお願いいたします。

手塚：手塚勲でございます。私は建築デザイン会社を経営しながら、67 歳で同志社大学のビジネススクールに入学しました。そして、本学のソーシャル・イノベーションコースに入学しました。

研究テーマは知的財産権の無償開放を通じたソーシャルイノベーションの実証的研究です。革新的木造建築デザインによる省エネ、再エネ社会の発展を目指してでございます。本来ですと、3 年で終了するところを、私は 5 年かかりまして、やっとの思いで 2015 年度にようやく

修了することができました。

この研究過程で一番苦しかったことは、本学には建築学科や工学部がなくて、査読付き技術論文を紀要に出し続けているのですが、なかなか通りませんでした。仕方なく私は外部の学会の日本エネルギー学会、そして、日本知財学会、日本建築学会に査読付き技術論文を出し続けまして、3 年がかりでようやく外部の学会誌に掲載され、本論文を提出することができました。また、この 5 年間には、今里教授をはじめ、新川教授、本多講師からご指導、ご協力をいただきました。この場をお借りいたしまして厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。

また、この間、私は国際意匠登録と特許公報を日本、全米、ユーロ圏、オーストラリアで取得することがきました。さらに現在では、青森駅前の都市開発のプロジェクトのコンペに本研究過程で開発いたしましためぐみプラスのデザインで参戦しております。多くの競合の中で私どものデザインは、現在、最終審査に残っております。11 月 28 日の最終決定に合格するように祈る思いでただいま待っているところでございます。

未来の子どもたちのために、このかけがえのない緑の地球のために、危険な原発や再生不可能エネルギーから安全で安心できる再生可能エネルギーへとエネルギーシフトチェンジを目指しまして、命ある限り、この研究を続けていく覚悟でございます。本日はお呼びいただきまして、誠にありがとうございました。（拍手）

佐野：ありがとうございました。続きまして西村和代さんお願いいたします。パワーポイントのご準備をお願いします。西村さんも修了生で嘱託講師をされております。

西村：皆さん、西村和代です。今日は、多くの皆さんの前でこのようにお時間をいただき修了生の立場で話しさせていただくことを大変ありがたく思っています。なぜか紅一点になっていますけれども、実はたくさんの女性の修了生がいます。後ほど登壇する大石さんも修了生です。今日は大学の授業日なので、「こういう講義がありますので」といって帰られた方とか、もともと仕事で来られていない方、また、別の後輩は今日ラジオに出演しているとも聞きました。いろいろなところで皆さん活躍をされているので、私が女性の代表なのかなと思います。

今の自分につながる SI に入学してからこれまで、ということで、出会いや、学び、研究そのものの話を、先生方と仲間に感謝を込めて発表したいと思います。

私は 1 期生で入学をしました。ドクターコースまで行って博士学位をいただいております。2009 年に起業をしました。私は今里ゼミに在籍していましたので、ビジネスの手法でということを、口うるさくというか、先生からいつも言われ指導を受けておりまして、鵜呑みにした私は自ら起業して社会で実践を行うことにしたのです。現在、カラーズジャパン株式会社の、代表取締役をしています。

そこで、運営しているのがおばんざい食堂「ひとつのおさら」、ということになります。そのアイデアは今里先生が箱崎公会堂という食堂をされていたのを講義で学んだことにあります。コミュニティレストランですね、もう少しおしゃれに言わないと（笑）。その話を聞いていたので、私もレストランという手法でやってみてはどうかなと思い、始めました。

他には、一般社団法人エディブル・スクールヤード・ジャパンの共同代表として全国いろいろなところに呼ばれてお話をする機会を頂戴しております。同志社大学の大学院の嘱託講師もしています。そして広島修道大学では農作業を教える非常勤講師をしています。

前期課程に入学し、行ってきた実験の順に、写真を交えて紹介していきます。まず、最初に始めた食育ファームですが今も後輩たちが続けています。江湖館で子どもレストランを開催することもありました。こうした地域に根ざす公共的な空間をつくっていくことが大事だということを感じていたので、自分でもやってみようと思い始めた実験が、コミュニティスペースをつくることでした。「京町家さいりん館 室町二条」と名付け、今日ラジオに出演している S さんも一緒に始めた事業になります。こちらも次の事業者の方が続いてさいりん館を運営されています。その後、食堂をつくりました。「ひとつのおさら」です。ここも町家をリノベーションしました。江湖館も同じく町家、さいりん館も同じく町家なんですけれども、こうした場所の力を活用したイノベーションを起こしていこ

うということにフォーカスして、博士論文をまとめております。

食堂の写真です。こんなおいしいおばんざいを提供しております。食にあまり関心のない方々にお立ち寄りいただけるようにと思い、食堂にしました。入りにくかったり、特別なお店にはしたくなくて、あまり店内にも張り紙をしたりいろいろなうんちくは書かないようにしています。それでも、伝えたい内容が伝わるようにと、あらゆるところに工夫をしています。

その後、エディブル・スクールヤード・ジャパンにつながっていきます。食育ファームでも行ってきた子どもへの教育は大切です。この写真は教育の真ん中に食べることを置こうということで、EATING が一番上に来ている、そういうポスターになります。

次は、現在のエディブル・スクールヤードの状況です。東京都の多摩市でこの事業を行っています。学校の教育活動に組み込まれ、教科の学習と統合して実施しています。

こんなふうに子どもたちはいろいろなところで試食、テイスティングをしながら、美しく飾られた食卓で食事を楽しみます。そういうことを家に持ち帰って、家の親御さんたちとも一緒に共有するということができています。

この写真は、広島修道大学の圃場、畑です。こういった大学機関でも若者たちにエディブルを体験してもらい、発信をしていきたいなと思っています。さまざまな野菜の収穫ができますが、学生は持って帰らないんですよ。それを「食べて感想を言うのが、宿題！」とか言って食べてみるきっかけをつくっています。

ここまで私が行ってきた実践は、いのちを大切にした社会を実現するための世直しと人助けであり、ソーシャルイノベーションだと考えています。今後も自分の足下での実践をしていきたいなと思っています。そんなこんなが、『ソーシャル・イノベーションが拓く世界　身近な社会問題解決のためのトピックス 30』の本にも書かれています。

春学期に地域環境教育論と食科学食育論とを担当させていただきますので、次に入学される方がいらっしゃいましたら、ぜひお読みください。

宣伝でした。ありがとうございます。（拍手）

佐野：面白い授業なので、ぜひ、皆さん受講してください。ありがとうございました。西村和代さんでした。釜で炊いたら本当においしい御飯です。

ラストバッターは渡辺雄人さんです。それでは、お願いいたします。

渡辺：こんにちは、渡辺雄人です。私は 2011 年にソーシャル・イノベーション研究コースの博士課程を修了させていただきました。その前は、公共政策研究コースの修士課程を修了しています。また、私の妻はソーシャル・イノベーション研究コース前期課程でお世話になりまして、西村和代さんと一緒に修了しております。研究コースの妻を持っているというのは、先生の教え子をとったわけではございません。一応、こういうことをしゃべるときはお断りしておきますが、一緒に SI コースには在籍しておりました。

私自身は今、現在、大原の方で農業をやっております。先ほど表彰されておりました長澤源一先生の弟子として有機農業を学んで有機農業を職業として生活をしております。学生のころは、いろんなところを寄り道して 10 年間歩いてきたなと振り返りながら、今日は写真をいろいろ持ってきたので見て振り返りたいと思います。

大原の棚田の様子です。手植えで、みんなで田植えをしています。農村の価値は何だろうということを原点に抱えていました。私の祖父母の家が岐阜県の山間部にありまして、隣村がダムに沈むなど、限界集落という名前が付けられたりして、人口減少都市化というところでダムに沈んでしまうような、その文化を何とかしたいなという、そういったところに研究の原点を持っておりました。ですので、自分自身もおじいちゃん、おばあちゃんの家が好きだったということもあって、田舎暮らしがしたいな、と漠然と思っておりました。

そんな中で今里先生の方から大原に住めという指令をいただきましたので、喜んで住み、また、大学の農地を管理させていただきながら、地域の子どもたちと一緒に田植えなどもしておりました。田んぼが育つと虫も育って、子どもも育ちながらですが、いろんな体験活動を行っておりました。これは、食育ファームで大学の

研究としての活動の様子です。いろんな方々に参加をいただきました。同志社の場合小学校がありますので、そこと連携した教育ということになりました。

その野菜を使った調理、一緒に作って食べるということも、いろんな場面で実践しました。これは、地域の大原工房の方と一緒に子どもと紙すきをしています。こういった仕事、大原工房では染色をされていますが、そういったことも田舎での職業の一つです。

長澤さんに教えていただきながら、米作り、野菜作りを行いました。

これは私がよそ道にそれたときに、いろんな体験をしたかったので、研究の中で、わらじ作り、わら細工作りなども体験しました。これは私の今の職業には、今のところ結びついてないんですけれども、将来的に何か結びついたらいいかなと振り返っていい写真だなと思って持ってきました。炭焼きなどもやりました。これも面白かったです。

結果的に農業がお金にしやすい。それから、自分の生活を立てやすいということで、いろんな方に参加いただきながらの農業、それから、販売目的の農業を実践してきました。これは、自分ところのお客さんに参加いただいて、じゃがいもを一緒に作る取組、野菜オーナー制度というのをやっていたときの様子です。一緒に植えたものをお世話をして一緒に食べる。これは非常によい経験でした。そして、今は、実はこの野菜オーナー制度をやっていません。なぜかというと、自分の子どもが今、3 人もできてしまいまして、そのお世話で大変です。と言うと申し訳ないんですが、自分の子どもの教育に励んでおりまして、一緒に娘たちと収穫している様子がこれです。

また、多くの方とかかわりながら、農業ができたというのは、非常にいい思い出ですので、こういった皆さんの笑顔を畑の中で作っていく。そういう活動も次の 10 年、子どもの手がかからなくなったらやりたいなと思っております。

佃農園と言います。にんべんと田んぼで佃です。人と田んぼの関わりを大切に、今後ともやっていきます。にんべんに農業の農という漢字もあります。「わし」です。わしという年齢までつきつめてテーマにして研究したいと思っています。先生方、これまでご指導、本当にありがとうございました。これからも頑張って研究活動を続けたいと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。（拍手）

佐野：はい、ありがとうございました。6 人のソーシャルドクターの皆さんにお話をいただきました。本研究科での学びを見事にその後の人生と活動、そして、お仕事に結実されていまして、まさにソーシャルドクターだなと教員の一人としてありがたく、誇らしくうれしく思ったしだいです。皆様、ありがとうございました。もう一度拍手をお願いいたします。（拍手）

皆さん、最後までいていただきますし、懇親会も皆さん参加されますので、休憩時間に話しかけていろいろ情報交換をしていただければと思います。

写真２　ソーシャル・イノベーションコース在学生の皆さんの発表

「現役院生が語る社会人大学院の日常」

続きまして、現役院生の皆さんにお集まりいただこうと思います。

奥野美里さん、廣瀬昌代さん、李月さん、森雄二郎さん、中川雄貴さん、杉山雅昭さん、前の方にお越しいただけますでしょうか。

この後、20 分ぐらいにはなりますが、実際に SI コースに入って勉強している、まさに現役の皆さんに、実際にどうなのか、ということをインタビューしていきたいと思います。お席はどこでもいいので、座ってください。はい、朝からスタッフをしていただいている人もいます。奥野さんの場合は、グラフィックファシリテーションをしていただいています。中川さん、蝶ネクタイが似合いますね。なぞの指揮者みたいな感じです。では、皆さん、拍手をお願いいたします。（拍手）

年代も性別もテーマもバラバラな感じですが、とてもパワフルな雰囲気が伝わってきます。ちょうど男女 3 人ずつということで、一番若いのは杉山さんということになっております。では、まずは順番にお名前と自分の研究テーマをどんどん話していっていただけますか。では、奥野さんからお願いします。

奥野：M1 の奥野美里です。研究テーマは私自身が実は発達障害、ADHD の当事者です。その当事者がどうしても生きづらさを感じてしまう。そこに対して何か解消するような、より肯定感を持っていけるようなサービスができないか、ということを研究しています。

佐野：ありがとうございます。廣瀬さん、お願いします。

廣瀬：M5 の廣瀬昌代と申します。私は今、小学生になった子どもが 2 人いて子育てをしています。子育てをしながら子どもたちにいろんな体験をさせてあげたいという思いがありまして、子どもたちと一緒に畑を耕して一緒に御飯を作って一緒に食べるという取組をしています。研究のテーマもそういったことを中心にやっています。

佐野：はい、ありがとうございます。李月さん、お願いします。

李月：李月と申します。M2 です。研究テーマは絵を用いた外国人児童と日本人児童の相互理解に関する研究をテーマにしております。京都市内や日本全国には外国人の増加の問題があって、その中でも日本語が母語でない子どもたちには学校の中でコミュニケーションの問題があります。その中で、私は図形を通して子どもたちがその図形を見てどういうふうに感じているのか？　それをきっかけにして子どものコミュニケーションができて、相互理解をする社会実験をしています。ありがとうございます。

森：森と申します。今、SI コースの D3 に所属しています。僕のテーマは、多文化共生ということで、外国にルーツを持つ子どもたちがどのように日本社会にコミットできるのか。社会関係が希薄となりやすい子どもたちの社会参加を促進するために、当人たちの意識を変えるだけでなく、彼らを受け入れる私たち社会の側の意識をどのように変革していくのかという観点から、主に外国にルーツを持つ子どものキャリア教育の現場を通して取り組んでいるところです。

佐野：ありがとうございます。中川さん、お願いします。

中川：中川雄貴と申します。博士後期課程 2 年目でございます。先ほどもちょっと言ったのですが、三重県津市美杉町は、津市の西の果て、奈良県との県境になるようなところで、町は超過疎地です。もともと 7 つの村が合併して、美杉村になりました。その後に平成の大合併で津市美杉町になりました。もともと各地区に小中学校があったんですが、私が二十歳ぐらいになるときには、すべてが統合されて一つになって、人口減少もすごいいきおいで進んでいまして、今は高齢化率は 57％まで達しています。そんな町において、4 代続いているホテル業を営んでいます。観光産業に身を置いているので、観光を通じて何か地域に貢献したいということで、ソーシャル・イノベーションコースの門をたたきました。観光を通じた地域のソーシャルイノベーションがテーマです。

佐野：ありがとうございます。杉山さん、お願いします。

杉山：杉山と言います。よろしくお願いいたします。私は後期課程の 5 分の 3、D3 と言っていますが、全体を 5 年に延ばさせていただいております。今はちょうど半分過ぎたところでございます。

ここのコースに来られる方は、結構いろんなミッションとか熱意を持って来られるのですが、私の場合は、本当に単純に定年したら男はすることないから大変やで、という声があちこちから聞こえました。で、定年してそれと同時に入学しようと計画をしていたんですが、現時点では、会社も「もう少し残ったらどうや」と言ってくれていますし、勉強も大変だしというころで、二足三足のわらじになっています。な

ので、こうしたいああしたいというのは、その時点ではなかったのですが、ここに空きテナントというのがあります。うちの祖父が小さな物件を残してくれています。ここで、なんとかSI的に使えないかなということで、事業を始めました。そのときの授業で今日、来られています谷口先生が、「まちライブラリーというのがあるで」と教えてくれました。そこで、ライブラリーを2年ぐらいかかってつくりました。ラッキーなことにこちらの卒業生でOさんという方が、ちょうどライブラリーの事務局におられまして、本当に立ち上げるのを手伝っていただきました。

それで図書館オープンということで立ち上げたんですけど、図書館だけではなくていろんな町の人も来られるし、子どもたちも遊びに来るし、最近では副区長さんだとか、まちづくりの課長さんとかも来られて、まちづくりをどうすべきかという話を一緒にしています。テーマもこういうことですが、ちょっと今、拡散しているところで、どういうところに落としどころを持っていくか、ということを考えているところです。

社会人の方で入学をご検討されている方はぜひ、あとでお声かけいただきたいと思います。会社とこの学校とどうやって折り合いをつけていったらいいかは、ちょっとくらいはお話ができると思います。よろしくお願いいたします。

佐野：さすがですね。この後は、フリーでどんどんトークしていきます。なぜ、このSIというおもしろおかしい不思議なコースに入ろうと思ったのか？　誰でもいいです。こういう理由で入ろうと思ったか？　はい、中川さん。

中川：きっかけは僕の先輩で三重県出身の方が、ここに在籍しておられて、ワークショップをモデルでやっていただいたんですね。そのときに今里先生と本多さんがいらっしゃったんです。本多さんに会った瞬間に「来ない?」と誘われて。（笑）

佐野：出会いの連鎖からつながっているという感じです。ありがとうございます。他に何か？お願いします。

杉山：私は東京の知り合いの獣医大学の先生が今里先生の後輩で、「京都に面白い先生がいるから連れていったるわ」ということで、江湖館で先生の手作りの刺身だとか食べさせていただいて、その横に本多さんがおられたんですよ。入った瞬間「来たら?」と。

本多マジックです。今、背中を押してほしいと思われている方は、あそこに本多先生が立たれると思いますので、ぜひ、「来たら?」と言ってもらってください。もう、すぐに来る気になりますから。

佐野：12月9日にSIコースの入門講座を京町家キャンパスの江湖館でやりますので、来ていただけると、濃密な空間を味わえると思います。ほかにこういう理由はというのは？　何かありますか？　前期課程の方、どうですか？「こういう理由で入学したよ」というのは？

奥野：私は本多さんじゃなくて、関根先生なんです。同志社大学でユニバーサルデザインの授業をやっていると聞いて、ユニバーサリンピックをやっている知り合いの人と参加してみたら、なぜかその後、先生に飲みに誘われて、その日「私、こんなことをしたいんですよ、本当は」と言ったら、「あなたみたいな人こそここに来るべきよ」と。

佐野：もう、定められていた、運命づけられていた。関根マジック。さすが、関根先生。

関根：それは本多さんから学んだの。（笑）

佐野：どうですか、入ってみて。

奥野：入ってみて、一緒に学んでいる人たちがすごく面白いっていうのが、一番ですね。
みんな熱いですよね。楽しいですよね。

佐野：では、次にSIコースに入ってみてどうですか？　こんなことが楽しい、あるいはこんなことが大変やった。何でも本音で言ってください。入ってみてどうだった？　実際どうですか？　実際の生活は？　廣瀬さん、どうぞ。

廣瀬：入って、世界が広がりました。夢みたい

なこと、夢を思い描くようなことにみんな一生懸命に向かっていっている、正々堂々と向かっていっているのがすごいなーと思って、私もその端っこに乗らせてもらおうかなという感じです。

佐野：素晴らしい。李月さんはどうですか？

李月：最初は本当に不安がたくさんありました。私は絵本を使って子どもたちとコミュニケーションをどんなふうにとるのか、ということを頭の中で考えているんですけど、どんなふうにするのか分からなくて……。インターンシップ授業のときに、谷口先生の授業を取らせていただいて、そのときに目標はなかったのですが、いろんな現場に行って、どんな絵本を使うのか？　少しずつ、具体的にしていきたいし、実際の現場を見ながらどんどんこういう問題に対してもっとしっかりしないといけないなと思っています。先生方も紹介してくださってすごくよかったです。

佐野：ネットワークが広がったということがすごく言えますよね。そこはこのコースの特徴かなと思います。いろんな社会人の方もおられます。森さん、どうですか？　ご自身が大学の教員をしながら来られていますけど。

森：僕自身は別の大学で教員をしていて、ここへ来させてもらっているので、少しその観点から言いますと、社会人も現役生もこんな楽しい大学生活は、本当にないと思います。本当に珍しいやり方をされていて、僕も大学教員ながら、本当にうらやましい。ここでやられている先生方がうらやましいし、ここで学んでいる生徒の皆さん、すごくうらやましく感じます。

本当にさまざまな業種の方が入り交じっていますので、これだけダイバーシティーというか、多様性のある集団は、おそらく大学という組織の中にいても感じることはほとんどない。ここにしかないものがあるというのを、これまで様々な学生や教員と関わっている中でもつくづく感じさせてもらっています。

佐野：ネットワークの場で学び会える仲間がいるというのは、僕ら教員も学ぶことが結構多いんですよ。例えば、発達障害の方に出会って、お話を聞いていたら、自分自身がかなり学べるんですよね。価値観が転換するような生の学びがあります。

今度は、SI コースを修了した後、ここでの学びとネットワークをどんなに生かしてどんな人生と仕事をやっていきたいか、イメージを、どなたでもお話しください。どうでしょう？　キャリア的な部分です。今、思っているイメージはありますか？

奥野：今は違う仕事をしていますが、発達障害に絡んで、それを支援するとかサービスをするとか、もしくは、発達障害の人が本当の強みとかを生かしたようなことができる何か事業ができるようになったらいいな、と思っています。

佐野：奥野美里さんは僕のゼミに入っていただいています。発達の凸凹が大きい人が発達障害と言われているけれども、実は全員何らかの凸凹があって、凸と凹をうまく生かし合うことによって良いチームになれますよね。凸凹を生かすという意味では、そういったネットワークはユニバーサルな価値がそこから生まれる可能性があります。そういうことを、実際に思います。

ほかに皆さん、いかがでしょうか？　今後こんなふうにしていきたいという意見はありますか？

森：後でも議論が出てくると思うんですけれども、この SI コースというものが、本当にアカデミックな世界でどういう位置づけになっていくのか、そのあたりがまだ弱いと僕自身感じております。本当にさきほど新川先生がおっしゃったように、ここで繰り広げられていることは、ある意味勉強とか、研究とかという言葉よりも活動だったり実践だったりするのかなと思うのです。とはいえ、アカデミックな世界の人たちとも、同じ土俵に立って話をしたり、あるいは一緒にコラボレーションできたりするような機会が双方必要なのであって、そこをもっともっと突きつめていかないといけないなと思っています。自分の大学でもそうですし、大学教育自体もどうイノベーションしていくのか、というのをしっかりと見極めながらやっていきたいと思っています。

佐野：第3部でもいろんな教員の皆さまで改めて話しますが、ソーシャルイノベーションやソーシャルイノベーターを育てる教育学とかソーシャルイノベーション学とかいうのが広がっていくのも大きな可能性ですよね。

ほかにどうですか？　今後の展望とかやってみたいこと、人生とかイメージある方はいらっしゃいますか？

李月：すみません。私は今修士2年生ですが、もうすぐ卒業したら博士に進学したいと思っております。頑張ります。

写真３　ソーシャル・イノベーションコース在学生とフロアの方々との討論

佐野：頑張りましょう。では、皆さん、会場からこの6人、もしくはわれわれ教員とか、先ほどのドクターの話で、ご質問ある方はいらっしゃいますか？　こんなことを聞いてみたいとかありますか？　いかがでしょうか？　教員とか院生の方でもいいのですが、関根先生いかがですか。

関根：突然のご指名ですね～。本当にここにいらっしゃる皆さんは、良い論文を書いて下さった方も、「ぜひ、入学して下さい」とリクルートした人もいます。

この研究科の学生のおもしろさというのは、それぞれが夢に向かって走っている人々だということです。で、教員はその夢に向かって伴走する人です。ここで教員をさせてもらった5年間も、客員として戻ってきた今も、皆さんの夢を語る姿を見るのが一番幸せでした。「これをこんなふうにしたら、私は社会を、自分をこう変えられると思うんだけど」とみんなが目をキラキラさせながら、その夢を語ってくださるのです。それにつきあっているだけでも何だか、ああ、幸せ、という感じになります。

これから、大学院に行こうと思っている皆さん、自分自身も変われるけれども、あなた自身も誰かの伴走者になれるのです。そういう意味で、ぜひ、ここで一緒に学んでみてください。それによって、たくさんの人々の課題やそれを解決するための提案や、そしてそのための夢を共有できるようになります。それはとても楽しいことなのです。ね、院生のみんな、楽しかったよね！また、私もぜひ、SI学というものを日本の中でつくっていけたらいいなと思いました。本当に院生の皆さん、これからも頑張ってください。で、ちゃんと論文出してね。

佐野：はい、関根先生の素晴らしい、心が震えるようなコメントをいただきました。ほかに何かコメントをお願いいたします。

Ｓさん：東京からまいりました。10周年、本当におめでとうございます。今日、初めて参加させていただくんですが、本当に素晴らしい皆さんが集まっているなという印象です。私の友人にもソーシャルイノベーションに興味がある友だちが何人もいるんです。同志社大学のサテライトみたいなのは東京にないんでしょうか？

私も入学したいなと思うんです。いかんせん、京都までは通いづらいので、サテライトみたいなのを出していただくと多くが入学を希望するのではないかなと思います。

新川：一応、同志社大学は、東京駅八重洲口に同志社東京事務所、それから、いくつかの教室等を備えております。ただ、今のところは一時的な講演であるとか就職支援とかに、テンポラリーに使っているところがあって、定期的にこうしたコースの開設などはしておりませんでした。でも、本当にニーズがあるのであれば、ぜひ、進出もしてみたいなと思います。新しい世界が拓けそうなので、これはやるしかないかな、と思いながらお話を聞いておりました。ありがとうございました。

今里：昨年度の話ですが、私がやっている授業はスカイプ、これは活用しています。連帯経済論という授業では、ステートバレンシア大学の先生とつないで、ここで教室をやっています。非常にリアルに授業ができます。で、呉市とか

非常に遠方から来ている人もいるんですけど、来られないときはスカイプで参加ということで、ゼミにも参加してもらえます。そういう遠隔授業を、文科省も今年から推進すると言っています。だから、距離を超えた授業を、これは教育イノベーションですから実現していきたいなと思っています。（拍手）

佐野：中川さんも三重からお越しで、時々僕の授業もスカイプとか FaceTime で参加されますよね。

中川：ここも本当にいろんな先生方、TA の方々に遠隔で授業をやっていただいて、それがなかったら修士取れてなかったです。それのおかげで、取れたと言っても過言でもない。

佐野：全部の回の出席が難しいというところがありますよね。最後のご質問にしたいと思います。

A さん：大阪から来ました。20 年間フェアトレードをやっています。僕もここの大学の卒業者です。40 年前はこういうのはなかったので、驚いています。途上国のマイクロファイナンス機関に投資しようという団体に日本でかかわっています。非常に先進的なオランダの団体で 75 年から 40 年間やっています。ソーシャルビジネスです。

ただ、今日のいろんなお話を聞いていたら、国際協力、国際関係を志向している人があまりいないのではないかとい印象を受けました。その点はいかがでしょうか。

佐野：いかがでしょうか。国際協力で論文を書いた院生は？

新川：田浦さんがいらっしゃいますね。また、論文のリストをご覧いただければと思いますが、ソーシャルイノベーションの分野は本当にいろんなところで世界とつながっています。例えば、NPO、NGO 研究を一つメインの柱に据えていると、必然、世界のネットワーク、あるいはそことの関わりで世界の問題にかかわっていかざるを得ない、そういうケースがあります。

例えば、環境教育をやっている学生の中には、諸外国の特に先住民の暮らし方を世界的に比較をしながら、そして、それを環境教育のプログラムとしてどう展開するか、そんな論文を書いた人もいました。まさにフェアトレードを今、研究しよう、勉強しようとする学生もいます。

こうした、ソーシャルイノベーションそのものは、私たちがこれまで進めてきた中でも、確かに一方では地域という身近なところにベースを置きながら活動をしていますが、同時にその問題というのは、常に世界とつながっていて多くの共通の問題、そして、相互に関わりのある問題というのをたくさん持っています。例えば、農業が今直面している状況を考えれば、世界の農業と地域の農業というものが、それこそ、生産と消費、それの間をつなぐグローバルなサプライチェーン、さらにはそこで生まれつつあるさまざまなイノベーション、それには良い悪いもありますが、いろんな技術革新、それこそ、遺伝子組み換えの問題も含めて、そういう問題まで含めて私たちは考えてきているということをご理解いただければと思います。

また、後ほど、これまでの研究の成果発表のポスターをご覧いただければ、たくさんの世界との関わりで執筆せざるを得なかった論文というのもお目にしていただけると思っています。

今里：私から簡単に一つだけ付け加えたいと思います。JICA 職員として 20 年もカンボジア、チュニジア、ネパールなどで所長職も含めて勤務されてきた方がソーシャル・イノベーションコース前期課程におられました。彼女は、これまで発展途上国に適用されてきた内発的発展のモデルを日本の過疎地にも適用できないかと考え、「マインドフルネス佐渡ツアー」という、インバウンド観光客を呼び込む社会実験を行いました。

佐野：ありがとうございます。ということで、幅広くこれまでの学位論文のリストがあります。これは修士と博士と両方混ざっていますね。さまざまなテーマの論文リストです。では、皆さん、どうもありがとうございました。